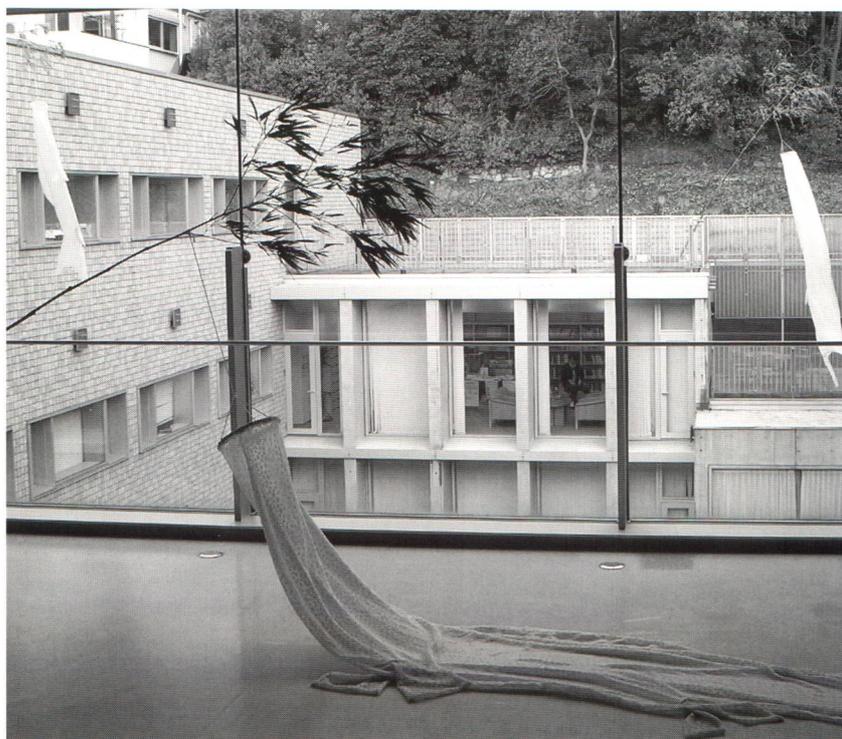


KIHS



NEWS LETTER

甲南大学人間科学研究所
Konan Institute of Human Sciences



2005
Vol. **06**

甲南大学人間科学研究所は、第6回公開シンポジウムを7月24日(日)に開催します。
タイトルは「花の命・人の命——震災10周年を記念して生命(いのち)を考える」です。
昨年7月の「秘すれば花なり——世阿弥の能楽論」を皮切りに回数を重ねてきた
「感性の変容」をテーマとする研究会の成果を一般に公開し、
ディスカッションを通じてより深めていきます。ご期待ください。
ニュースレター第6号では、シンポジウムに向けて行われた最新の研究会の様様をご紹介します。

植木鉢の花 ——アウトサイダー・アートが生まれる土壌



講 師: 服部 正
(兵庫県立美術館/西洋美術史学)
日 時: 2005年4月15日(金)
場 所: 18号館3階 講演室

人間が本質としてもっていると考えられる、さまざまな形での表現への欲求。前回の研究会では子供の絵画作品にその欲求が花開く姿を追いました。今回はさらにアウトサイダー・アートに光を当て、講師に服部正氏を招きました。氏は、多くのアウトサイダー・アートの制作者たち、制作者にかかわる人たちと接し、またアートとして世に問えるものを発掘・紹介しながら、日本におけるアウトサイダー・アートの現状や社会的な問題を追究されています。研究会ではアウトサイダー・アートの歴史と定義から始まり、国内外の作家と作品の紹介とともに、作品が生まれてくるエネルギーの源が探られました。

アウトサイダー・アートは、20世紀初頭にヨーロッパの精神科医によって注目された精神病患者たちの描画を起点とします。それらは「作品」として関心を集め、前衛芸術家たちに影響を与えたり、収集の対象となったりして、モダン・アートとは異なるアートの世界を作ってきました。「アウトサイダー」とは事典などによれば「正規の美術教育を受けていない者」、またJ・デュビュッフェの定義では「文化的芸術に毒されていない者」を指します。氏はこれに「発表する意志をもちずに制作する者」を加えます。現代の日本社会においては小中学校での美術教育を受け、またさまざまなメディアを通じた美術情報に多少ともさらされているので、誰に見せるためでもなく制作する・表現するとなると、その多くは知的障害者や精神障害者、あるいは霊能力者などになります。

では彼／彼女たちが発表する意志もなく制作するのはなぜでしょうか。服部氏は制作過程の特異性に着目し、「制作者たちはそうすることで世界との安定した関係を取り結んでいる、逆にそうしなくては落ち着いて居られない」と指摘します。ある人は毎日往復する路上で気に入ったものを拾い集め、それを何かの形に仕立てます。ある人はただぐるぐる歩き回ります。ある人は気に入ったバスの席に座るために、

その席が空いているバスを待ち続けます。ある人は神の声にしたがって筆を動かし続けます。彼／彼女たちは延々と同じことを繰り返し、飽きればやめます。一見するとそこには何ら計画性も論理性もないように思われますが、どの人の行為にも、ある種の必然から一定の秩序とスタイルができあがっていて、結果として破天荒で面白い「表現」「作品」になっているのです。彼／彼女たちの表現行為の必然性は、まさに植物が生きのびるためにしていることの必然性と重なります。植物はそれぞれのスタイルで環境に合わせて根を張り、枝をつけ、時機をみて受精し、そして人間が見ていようがいまいが花を咲かせるのです。

ところが、一般的な視点からするとその行為や制作物は理解されず、時には社会的に逸脱していると問題視されてしまうそうです。しかも多くの人は言葉できっちりと説明することができません。だからこそアートとして価値づけ、その表現行為と作品を面白いと思って残すことが重要なのです。たしかにアートとして作品のよしあしを判断するのは、美術の文脈の内側にいる人間であり、そこには切り捨てられるものがあるのではないかと、という批判もよく出ます。しかしどのような場合であれ、価値付けのあるところを取捨選択は必ず発生するものなので、アウトサイダー・アートに関してのみうるさく言うのは誤りでしょう。むしろ、価値付けによって彼／彼女たちが社会に受け入れられ、アウトサイダー・アートという活動の場、つまり世界と関わる場が保たれ、さまざまな花が咲くことができるのです。

このような興味深い服部氏の論と色とりどりの作家と作品に、フロアの聴衆は非常に触発されました。改めて、人間には表現欲求が本能的に備わっており、さまざまな形で開花することを認識し、また、我々自身がその花に気づき、眺め楽しみました。この意味では、今回の研究会も花が咲き開くひとつの場となったといえるでしょう。

「沖縄・島唄に花を読む」



講 師：高阪 薫（甲南大学／近代日本文学）
日 時：2005年5月13日（金）
場 所：18号館3階 講演室

今 夏のシンポジウムに向けた「感性の変容」研究会では、日本の伝統的な発想にとどまらない視点から「花」を捉えようとする試みを続けています。今回は、近代日本文学が専門で、沖縄にも造詣の深い高阪薫氏に、沖縄の「花」についてご講義いただきました。

ウチナンチュ（沖縄の人）の「花」の捉え方や呼び名は、ヤマトンチュ（本土の人）とは全く異なっています。高阪氏はまず、沖縄の代表的な花について、ウチナンチュにとっての意味や役割を、絵や写真と共に紹介してくださいました。沖縄であちこちに咲いている赤花（ハイビスカス）と県花であるデイゴは、南国の空に映える赤い花です。赤い花は時に、沖縄戦で流された血の象徴とされてきました。また、沖縄で草木が芽を出す季節をうりずんと呼び、その頃新緑の山々を白い花で彩るのがイジュです。イジュもデイゴと同様に大木で、建材として利用され、その毒はかつて漁に使用されていました。現在、アダンとともに沖縄を代表する壮大な景観を作っているウージ（サトウキビ）は、1609年、奄美を奪取した薩摩藩により導入されたのが始まりであり、その後の琉球侵略の歴史と深いつながりを持っています。ウッチン（ウコン）やゴーヤー（ニガウリ）、フーチバー（ヨモギ）など、最近本土でも健康食品として取り上げられるようになった植物の薬効は、沖縄では昔から利用され、ムーチー（餅）を包むサンニン（ゲットウ）の葉の香りには魔除けの効果があるとされています。シークワサー（ヒラミレモン）はクガニ（黄金）とも呼ばれ、黄金色の実には太陽の霊力を吸収したものとして、古くから非常に珍重されてきました。クバ（ビロウ）は神の霊が宿る大変重要な木です。このように沖縄では昔から、人々の暮らしと花が、本土以上に強い結びつきを持っているのです。

続いて高阪氏は琉球王朝が15世紀から17世紀に編纂した沖縄最古の韻文集『おもろさうし』の中から、いくつか紹介されました。『お

もろさうし』の特徴は、叙事詩、特に神歌が多く、万葉集に多い相聞歌はほとんど見られないことであり、そこには儒教の影響があると言われています。シークワサーやクバもしばしば『おもろさうし』の神歌の題材となっています。そして神歌の背景には、太陽への信仰、さらには太陽の上がる東（沖縄ではアガリと呼ぶ）の遙か彼方にあるニライカナイ（神の住む国で、そこはあらゆる富、豊穡、生命の根源があるとされる）への信仰が存在しているのです。その意味で、太陽の光を受けて黄金色に輝くシークワサーの実に宿る霊力が、古来重要視され続けてきたのです。現在も沖縄の祭では、綱引きで必ず東側が勝利することになっているなど、東方信仰の精神が受け継がれています。

さらに高阪氏は、遠方からの客人を歓迎する歌でありながら、実は薩摩の役人に対する反抗心が裏に込められている奄美の「朝花」から、嘉納昌吉の「花」、さらには今、若者に人気の沖縄出身バンド ORANGE RANGEの「花」まで幅広く、花に関する歌を取り上げられました。そして最後に、沖縄で「あけもどろの花」と呼ばれる朝日をとらえた、非常に荘厳で美しい写真を見せてくださいました。太陽が「クガニバナ（黄金花）」と呼ばれることからわかるように、沖縄では太陽はまさに「花」であり、その「花」への憧れとニライカナイ信仰が強い結びつきを持ちながら、長い間受け継がれてきたのです。高阪氏によれば、ORANGE RANGEの「花」の歌詞に込められた花イメージは、沖縄で受け継がれてきたそれとはやや異なっているようです。こうした沖縄の精神が、若いウチナンチュ、そしてこれからの沖縄に受け継がれていくのかどうかと、高阪氏は危惧されていました。

後半のディスカッションでは、多視点から議論が交わされ、ニライカナイ信仰と、アジアの海洋民族に広く見られる観音信仰との関連などについて、興味深い話題が提供されました。



※これまでの活動

2005年2月～2005年5月

研究会

第18回 ばらの花束

——子供のアートはどのように開花するか(力動的アート論のために)

日時：2005年2月23日(金)
講師：岩城 見一
(京都大学大学院文学研究科/美学・芸術学)

第19回 植木鉢の花 ——アウトサイダー・アートが生まれる土壌

日時：2005年4月15日(金)
講師：服部 正
(兵庫県立美術館/西洋美術史学)

第20回 沖縄・島唄に花を読む

日時：2005年5月13日(金)
講師：高阪 薫
(甲南大学/近代日本文学・沖縄文学)

研修会

第5回 トラウマおよび解離臨床へのアプローチ

日時：2005年3月13日(日)
講師：白川 美也子(国立天竜病院/精神医学)

出版事業

甲南大学人間科学研究所叢書 心の危機と臨床の知5

『埋葬と亡霊——トラウマ概念の再吟味』

編者：森 茂起(甲南大学/臨床心理学)
執筆者：下河辺 美知子
(成蹊大学/精神分析論・アメリカ文化)
白川 美也子(国立天竜病院/精神医学)
高橋 哲哉(東京大学/哲学)
棚瀬 一代(京都女子大学/臨床心理学)
中井 久夫
(兵庫県こころのケアセンター/精神医学)
福本 修(恵泉女学園大学/精神分析)
港道 隆(甲南大学/哲学)
森 茂起(甲南大学/臨床心理学)

2005年2月28日 人文書院より出版(2500円+税)

※これからの活動

出版事業

甲南大学人間科学研究所叢書 心の危機と臨床の知6

『共振——花の命・人の命』(仮題)

編者：斧谷 彌守一(甲南大学/言語論)

甲南大学人間科学研究所叢書 心の危機と臨床の知7

『心と身体の[オルター]グローバリゼーション』(仮題)

編者：港道 隆(甲南大学/哲学)

上記2巻は2006年2月頃 人文書院より出版予定

公開シンポジウム

第6回 花の命・人の命

——震災10周年を記念して生命(いのち)を考える

日時：2005年7月24日(日) 1:00pm～5:30pm
場所：甲南大学 5号館511教室
共催：兵庫県立淡路景観園芸学校
シンポジスト：田中 修(甲南大学/植物生理学)
岩城 見一(京都大学/美学・芸術学)
高阪 薫(甲南大学/近代日本文学・沖縄文学)
浅野 房世
(兵庫県立大学・兵庫県立淡路景観園芸学校/園芸療法)
川戸 圓(大阪府立大学/臨床心理学・ユング心理学)
指定討論：加藤 清(隈病院/精神医学)
斧谷 彌守一(甲南大学/言語論)
司会：森 茂起(甲南大学/臨床心理学)



【編集後記】

私達を取り巻くものの感性も変容するのではないのでしょうか。研究所がある18号館も少し変容させてみました(表写真)。仕掛け人は若手作家、堀土真琴さん。京都京北町の薬師寺のご住職(左写真)と連れ立って岡本まで来て下さいました。18号館を水槽に見立て、そこに鯉を放流。新緑のなか六甲の風に泳ぐ鯉が、幾何学的な建物に表情を付け、18号館に動きが出ました。これから夏のシンポジウムに向けてKIHSも動きます。